

## 小野さんを送る

池田 昭

小野さんは余りにも早く逝った。

彼の悲報は奥さんからのものであった。一瞬、耳を疑いながらも、彼の運命を知った。不可避の人間の運命を。

普段、電話で、時折、直接会って、学問やその他の学界の動向について話し合っていた。悲報を聞く一ヶ月前にも、電話でそれとなく体の具合を、主にさりげなく学者として残すべき仕事を聞いたばかりであった。だから、奥さんからの悲報に接し、驚き以外の何物でもなかった。けれども、彼が現在の医学では不治の病い、しかもオペなどによっては容易に治癒しがたい患部を冒されている

ことを、医学生となっていた御子息から聞いていたので、彼の死を冷静に受けとめもした。

小野さんを知ったのは大学院に入ったときであった。二年上の先輩で学年の違いもあり、また研究領域において心理学と社会学の相違もあった。しかし、これらの違いを越え、親しく死ぬまで研究者として友情を交わしあえた始まりは、早くからであった。

小野さんは都立の高等学校の定時制に勤務しながら、大学院に通っていた。私も千葉の高等学校の定時制に勤めながら、大学院に通っていた。都立の高等学校のことはわからなかったが、当時、

千葉の高等学校はほとんどと云ってよいほど、地方自治体の建物とは違って戦前からの木造のそれであって、火事でも起ればひとたまりもなく燃えつくしてしまうチャチなものであった。そんな教員室に着物を着て私の授業の終るのを待っていた人が小野さんであった。都立高校は週五日制で休みがあり、私の勤務する高校近くに奥さんの家があり、ここに住んでいたの、訪れたのであった。そのとき、お互いに何を話し合ったのか、いまでは記憶にはまったくない。こんなこともあり、今は医学の道にすすんでいる御息が私の家を訪れ、ほとんど同じ年令のわが愚息と遊んだりした。

こうした大学院学生の共通の境遇がお互いを深く結びつけたかも知れない。

小野さんは、私と違ってこの間、ないしはその後、いかなる動機かわからないが、図書館学を図書館短大で学び、司書の資格をとっている。小野さんが私に直接語ったところでは、このさい一番であったと云う。これが縁で、後に図書館短大に迎えられて、図書館学を講義することになった。記憶は定かでないが、この間、私とともに社会心理学を他の大学で講義してもいる。

この時期には、小野さんは専門の宗教心理学、隣接科学の社会心理学、さらにはこれらの学問領域とは異なる図書館学の翻訳を手がけている。彼の知識欲の旺盛さが示されていることは明らかであろう。私など宗教社会学の一領域にとどまって

いるのに比べ、及びもつかない能力がみられる。

この能力は、一見多くのこれらの領域の翻訳書からすると、理論のレベルで発揮されたようにみえるかも知れない。しかし、そうではない。

私が和歌山大学に籍をおきながら、京都の亀岡にある大本教本部に通い、資料集を作成しているときのことであった。小野さんはひょっこり大本教の調査にやってきたのである。この調査のことはいまでも忘れられない。学生寮ではないが、多くの学生が入っているプレハブのアパートの一室で、寝ずに大本を含め新宗教について語り合ったことである。韓国の新宗教と比較し、日本のそれが「軟体」であると。

この指摘は、文化人類学者の中根千枝氏の日本組織の「軟体」説とともに、私もかねてから考えていた新宗教の特徴と一致し、お互いに共感し合ったものである。

小野さんは、小柄であるものの多くの学問領域に研究のメスをいれた。けれども、俗に云う「器用貧乏」ではない。研究のそれぞれの領域において優れた業績を残したが、とくに私の宗教社会学の分野においてもそうであった。

最近、学際領域の研究は旺んである。しかし、見事にこれらを考慮することはむづかしい。評論のレベルでは容易である。それを克服した小野さんは宗教学者のなかでは稀有であった。静かに寝むれ、京都の北の故里の地で。